

編纂者として、

飛煙

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

MHWの「相棒！」と元気に言うあの人過去話です。

なぜ新大陸を目指したのか、なぜ受付嬢ではなく編纂者として行くのか。

その理由は――

※彼女の過去については「祖父が新大陸に行く夢を叶えられなかつたため、自分がそ  
の夢を叶える」という情報以外筆者は知りません。ここで語られるのは筆者の妄想で  
す。それでも、「支給品BOXを漁る」「突然の相棒呼び」等の行動の理由についても書  
いていく予定です。

また、MHWをプレイする時にちょっとでも彼女のイメージが変わればいいなと思つ

ています。

目

プロローグ

1話 「かわいい孫娘」

次

8 1

# プロローグ

独特の塩味が肌を燻す。

強い日射しと相まつて少し痛い。

広がる空と海、そして巨大な木製の船が縦にゆれる。

流れるモノとヒトとアイルーを見ると、自身の居場所が疑わしくなつてくる。

時間と場所は何度も確認した。荷物も業者さんが持つて行くところをこの目で確認した。

あと他に必要なものは身に付けている……はず。

忙しく持ち物を確認する。時間を確認した回数を超えるくらいに持ち物を確認し終えると、また別のことを見つけることになる。

(装備のメンテナンスがしたい……)

誰が持つても身の丈に合わない”本”をぶら下げているおかげで、やりたいことができないそのもどかしさについ体が動いてしまう。

不測の事態に不備が起こるのだけは  
　　今日に備えて何度もやつたことだし

でも、でもこれが最後の確認だから

ここに来てからずつとこの調子だ。もしかすると、本の存在を理由にメンテナンスをしていないからこうなのかもしれない。  
確認すれば少しばかり表情が晴れそうだ。

(不安は晴れないけど)

せめて周りに心配をかけないように振る舞うくらいの余裕は欲しい。

(?? ??) ニヤツ

服をついつと引っ張られそちらに体を向けると、手のひらを上にし、片方だけではなく両方の手をこちらに差し出したアイルーがこちらを見ている。

(あー、可愛い。じゃなくて、握手？は片手だから……いや両手でも？)

冴えない考えを羅列していると、アイルーが私の本を少し持ち上げ、首を傾げる。  
『語るまでもないでしょ？』と問いかけていたようだつた。

どうやら本を持っていてくれるらしい。

「！」

ありがとうございます！」

ではお願ひしますね～、と親切なアイルーに本を預ける。

(不安はもう、ないんだけど)

不安はただの寂しさだつたようだ。

メンテナンスをササッと終わらせ、この親切なアイルーとおしゃべりしようと心に決める。

このままでいいけど油を挿した方が

少し霞んでるから研磨しようかな

スコープは1・2倍から2倍…… 3倍の方が

### 《視点：親切なアイルー》

『手伝うよ』と首を傾げると、お礼の言葉と共に大きな本がボクに渡される。

(伝わったみたいでよかつたニヤ)

お姉さんがすぐに小物をじっくり見たり、叩いて鳴らしたりし始める。

油を挿したり、磨いたり……

(……)

ハンターさん達とは違う、繊細な手入れについて見入る。

ボクと話していた時は柔らかかったお姉さんの雰囲気が、今は息を呑むような雰囲気だ。

(無表情なのに、楽しそうニヤ)

そのためか、ピリピリとした空気ではない。

自然な空気。それでいて厳か。

いつか見た渓流を彷彿とさせる。

本を抱く手に力が入る。

そしてまた、見ることに集中する。



思つていた以上に時間がかかってしまった。優秀なハンターが狩に出ていれば大型モンスターを2体程討伐していただろう。

「(、・。・)ニヤツ」

「ああ！ありがとうございます！」

少しだけこの親切なアイルーさんのことを見失してしまっていた。

(…… そうだ!!)

船の方を急いで見る。まだ荷物は運び終えていないようだ。

「時間、ありますか？」

「(\*≧▽≦\*)ニヤツ!!?」

それから時間の許す限り親切なアイルーさんとおしゃべりを続けた。

「……つてことがあつたのニヤ！」

だからインクツクにだけは気をつけるニヤつ！」

「そなんですね！ふむふむ……」

本に情報を書き込む。まさかあの大型鳥竜種にそんなことができるとは……こちらも何か話そうと思い、本をめくつて話のネタを探す。

「ああそだーこの話は知つてますか？」

クルペツコというモンスターの素材で作つた笛があるんですけど、

試験的に作られた笛はなんと大型モンスターを呼び寄せちゃうような代物で  
〈ブオオオオオオオオオオ!!!〉

言い終える前に低い角笛の音が響き渡る。

どうやらすべての荷物が積まれたようだ。

(角笛が鳴るなら事前に言つてくれればいいのに)

あれだけあわあわしてた自分がひどく滑稽に思えた。

しかし、それでもこの親切なイルーさんと巡り会えたことを思うと頬が自然な状態になる。

「時間みたいですね。」

〔( ̄ ̄ ̄ )〕

ハンターさんの所に戻らなければならぬようだ。

(また船で会えると思うんだけど)

随分となつかれたようだ。

「では、また！」

「(\*・ω・) ダニヤツ」

親切なイルーさんが遠くへ走り出す。

(……)

私も随分と気に入つていたようだ。正直、すごく寂しい。

親切なイルーさんがこちらへ振り返り、両手を体いつぱいに振る。

こちらもニコつと笑い、片手で本を掲げ、もう片方の手で小さく手を振る。

(おしゃべり楽しかったよ!! ありがとう!)

伝わつたかは分からぬ……。いや伝わつただろう。

親切なイルーさんはまた走り出した。

私も行かなければ。船へ体を向け、そつと歩き出す。

ふと、足を止める。

まだ私は浮き足立つてゐるようだ。

目を閉じ、集中する。

なぜ私はここに来たのか。

新大陸を目指すため。

なぜを目指すのか。なぜそれが新大陸なのか。

それは……じーじが出来なかつたことをして、その話を聞かせるため。

私にたくさんのこと教えてくれたじーじに、それ以上にたくさんのこと今度は私が教えてあげるんだ。

そしてゆつくりと振り返る。

今までのことを

# 1話 「かわいい孫娘」

『視点：ある少女の祖父』

「♪」

隣で上機嫌な孫娘が不規則に歩き、リズムを奏でる。

「……」

それを横目に見た自分は、2つの意味で内心ため息をつく。

1つは幸せ。もう1つは危惧。

自分がついているとは言え、自然の中へこんなにも小さな子どもを連れてきてしまつて良かったのか。  
ダメに決まっている。しかし――

「昨夜――

「じーじじーじつ、あしたもおでかけー？」

「おうともさ！」

「じいちゃん、明日は蜂の巣ごと取つてくるからな！おおきいぞお～」

屈んで目線を合わせながら、期待させるように言う。

「ほんとー!? どんくらい? ねえねえどんくらい?

こんくらいかな?」

真剣な顔つき。両手で大きさを表現している。

その年で自分で考えようとするとは、やはりうちの孫娘は天才だ。センスもある。

しかし孫娘よ、その大きさは

「きのう食べたポポノタンがそんなにうまかつたのか!」

「?

……!! ? ホントだ……

自身の行動に驚いているようだ。気付けただけでもハナマルあげちゃうぞ!

愛しくなればなるほど息子と張り合いとなる。

息子よ、狩の腕は親父を超えたことにしていいぞ。武器はハンター・ボウI, さらには寝巻き姿でアオアシラに挑み5分と経たずにボコボコにされたことは親心で黙つてやる。孫には言うがな。

しかしポンポンタンとはなかなかの選択じゃないか。だが面白さが足りない!!

「よおし! 今度はじいちゃんがホワイトレバーを持ってきてやろう。  
ぜつつたいに驚くぞ! なんでかは自分で考えなさい」

「むつ」

お決まりの『なんでー?』が言えなくて少し機嫌を損ねたようだ。  
よしよし、我ながら上手く話を逸らせたな。今日は調子がいいぞ!  
明日の話題は完璧に忘れたみたいだ。

「いらない。」

「……」

!?

どういうことだ!?

なんだ? どうした?

何がいらないんだ?

じいちゃんか? じいちゃんは用無しか? 嫌か?

パパのほうがいいか? じいちゃんそれはイヤだ!

あ、ホワイトレバーか? いらないの?

なんでー? おちつけー?

「レバーはいいから、あしたじーじとハチミツとりたい」

「……」

ああ、孫娘よ。じいちゃん嬉しくてポツクリしそうだよ。

『じーじと』つてもう……!!!

しかしなあ、大型モンスターはなんとかなるが小型モンスターに囮まれるとなあ。モドリ玉を使えばいいのだが、それが無いときに自身の力で生き延びる術を身につけて欲しい気持ちが。

先にモドリ玉を教えると、息子のように後々痛い目に合うだらうから止めよ。  
息子はいいが孫はいかんつ！

「……」

我が孫娘はきゅつと口を結んでこちらの様子をうかがっている。  
モンスターと睨み合う時の緊張感を感じる。

い、いかんッ！早く決断せねばッ！！

『ハチミツとりたい』……か。巣を取りたいとは言わなんだ。  
たまたまか？それともハチミツの方がつまみやすいからか？  
「やつぱり……ジャマ……？」

じゃ、邪魔つてそんな一角竜並に尖った言い方はしないが……

「アタシね、自分で確かめたい！」

本当にあんなにおおきなお肉が舌べろなの？  
本当にあのイチゴは砂漠で生きてるの？

絵本にも、じーじのハンターノートにもそう書いてあるけど……けどっ!!?」  
納得がいかないらしい。

前から行きたそうにはしていたが、てつきり宝さがしをしたいだけかと思つていた。  
これも血筋か?いや、この年の子が持つ探究心は計り知れない。  
どちらにせよ、教え込むにはちょうどいい時期か。

「わかった。」

「え?」

一度立ち上がり、息を吐いてから屈みなおす。

「今度はじいちゃんからの頼みだ」

不安と期待の入り混じった瞳を、まっすぐな視線で射抜く。

「自然に入つたら常に考えろ」

「見たものと己を信じて、直感で判断しろ」

「決断と行動は同時にやれ」

「自然界のうまいモノの近くには、必ず危険があると思えるようになれ」  
首を小さく縦に振りながら、硬い表情をさらにしかめる。  
多い且つ難しいか。だが印象に残つたものだけを頑張ればいいさ。  
じいちゃんの孫だ。できるできる。

「今からいうことだけは守れッ」

「!?」

少し力が入ったためか、瞳孔が小さくなつた顔が見える。  
「死のうとだけはするな」

己が鳴らした残酷な言葉に胸が痛む。

ドンツドンツと脈打つ体は、今まで腐らせていた機能を蘇らせているようだ。  
死なない大人にしてやる。

それまでは、おまえのじーじがおまえを必ず助ける。

「しないよ？」

「なら、お互い誓い合おう。

じいちゃんは死のうとしない。」

「しのうとしない」

「それは誰が誓つてるのかわからんな」

「?」

「じーじは、死のうとしない」

口を一文字にする孫。微かな沈黙を迎えると、彼女の口の力が抜ける。  
言葉の意味に気付いたらしい。賢い子だ。

「あ……あ……

アタシは、アタシは……」

不安にゆれる瞳を、変わらずまつすぐな視線で見つめる。

「誓えるよ……

アタシは、死のうとしない。」

「ふう……」お互に重なるため息に、今度はばらばらに笑う。

「でも」

何とはなしに無言でその場に座る。今日は月も無言を選んでいる。

少女は立つたまま何も言わない。

左手で隣の地面の小石をしゃらららと払う。

そこに賢い少女はゆつくりと音もなく座つた。

俯いていて、表情は見えない。

「フルベビ漬け」

モンスターの赤ちゃんを丸々漬けた食べ物。

彼女が唯一初めて見て喜ばなかつた食べ物。

だがなぜ今それを？

「あの赤ちゃんがアタシでまだ生きてたら？」

……ああ。もうそこまで鮮明に感じているのか。

「生きたいのに、どう頑張つてもダメそ�で。

でも！諦めたく……なかつたら……？」

そんな、そんな不安を抱えながらも決意し、口にした誓いの言葉だったのか……重い。

それを見抜けなかつた自分に腹が立つ。ハチミツを取りに行く程度。そんな気持ちが少なからずあつた。すつかり丸くなつてしまつたのだな、自分は。

だが気付けた。いや、気付かされたのか。

己の胸の痛みはどうやら、甘さ弱さが崩れる日常の予感に悲鳴をあげていただけだつた。

寝巻きで熊に挑んだアソツの方がよっぽどましじやないか。

こちらも負けじと静かに決意を改めた。

そして答える。

「どつても簡単なことだ。だからよく聞け？

誰でもいいから名前を叫べ。それでいい。」

「誰でもつて？」

「どうしようもない時はな。決まっていちばん親しい相手の名前が出るんだよ、最も大

切な相手の名前だ。」

悪いな息子よ。この子の口はしばらくお前の名を呼ばないぞ。・

「もし、もし選べなかつたら？」

「それはまだ自分が頑張れる証だ。

その時は自分が一番強いヤツだ。負けることはないな」

「ホント？」

「嘘」と言えば満足できそうなのか？」

「ううん」

「本当のことだ。どうだ？納得したか？」

「ううん」

「なら、どうする？」

「自分で、感じる。ううん、感じて、考える。納得するまでずっと、ずっと……つ

？」

夜空に星が川のようにきらめき、地上には雷光虫の淡く青い光の海が広がる。

遠くの火山が不完全な日の出の如く、弱々しく輝いている。

隣には全ての光を掴まんと手を伸ばす、決意に満ちた少女。

(どうりで月がないわけだ)

知らない千紫万紅の景色を、目に心に記憶に全てに刻み込む。かつて目指していた光景は、これほどのものなのか。

いやこんなものではないだろう。

新大陸。そう言われる未開の地へ行けば、いとも簡単に扇情されると、心が生きると思つていた。

見慣れている筈の景色と少女が織りなす、新しい顔と未知の香り、そして、不安と期待の入り混じつた始まりの予感。

そう、始まりの予感。

いつからかそこに行くことが終着点になつていた。あまりにもそこに期待を持ちすぎた。

「ねえ、じい」

もしそれを見た後……自分はどうなつていただろう？始まりを前にして、不安と期待を感じるのだろうか？

「じーじ？」

いや、やめよう。らしくない。この子の不安が移つたか？

「ん」

ついつと優しく服を引っ張られる。「どうした？」と孫娘の方へ上半身を動かし、向き

合う。

「……」

少し視線を外される。ど、どうした？

「ううん、なんでもない♪」

急に上機嫌になり、そう言つた我がかわいいかわいい孫娘。

(まつたく分からん)

決意が足りないのか？なんだ？分からんぞ！？

「なんでもない♪……のか？」

「なんでもない♪……つて言つたら、満足？」

くおお!!(?)の小娘返してきおつたわい！

「い、いや？」

「ふうん？」

え、つ！その先は聞かないのか？

終わり？なぜそんなにもニコニコしているツ!?

そんなミステリアスな子に教育した覚えは無いぞ！誰に似たんだ？

絵本か？いや、すべて暗唱できるくらいには確認したはずだから問題は無い、という

ことは分かつて いる、が。

「やつぱり、じーじはじーじ」

「おう、じーじはじーじだ」

だがな、じいちゃんも決意したんだ。前ほど抜け目は無いぞ。

「……♪

じーじあつたかいから好きー」

こちらの膝に頭を乗せ、腰をきゅっと抱きしめられる。

「んふー♪

更に顔を埋うずめてくる。

そつかー。じいちゃんのこと好きかー。

じいちゃんも好きー。

そうだよねー。けつこう話し込んじゃつたからねー。

ちよつと眠いかー。

あしたも早いしー、もう寝よつかー？

じいちゃんも寝たいー。

「明日は早い、後は分かるな？」

「うんつー！」

いつの間にか孫の頭を撫でていた手を、今度は意識して止める。

お互に立ち上がり、さつきまで見ていた景色を眺める。  
しつかりと感じられる。自分はまだまだ大丈夫そうだ。

「行くぞ」

手をつなぎ、無言で帰る。

明日はスリングガーでどうにかするか。優先するのは生き延びる術だ。

ーとある山の中（冒頭に戻る）ー

決めたことだ。

とはいえ心配は心配だ。

幸い、目的の蜂の巣は近場。ギルドからの緊急連絡も無し。あの熊は時期的にも、別の場所にある蜜を頬張つていることだろう。

茶色い巾着袋を、既になんてことのない木の実や雑草でパンパンにしている孫を見る。

ハチミツ系の採取道具はこちらが持っているとはいえる、見境が無いな。

しかしその姿を見るに、同じものは採っていないように思える。

取るものリストアップしていたのか？だとすると、いつたいそれらで何をするつもりだ？

「あ！あつた」

大きな声を出しそうになり、慌てて抑えたようだ。  
うむ、及第点だな。そうやって走り出さなければ。

「♪」

どうやら探し物を見つけると、じつとしていられないらしい。

まだ比較的に安全な場所のため、近くの場所なら何も言わないで好きにさせている。  
そういうことをしつかり身につけさせるのは、安全な場所、危険な場所の区別をはつきりできるようにさせてからだ。

何も分かつていないのでじつとされるのは最悪だ。

「ん？」

「んー？」

そろそろだ。

だが妙な雰囲気が肌に纏わりつく。

「もうすぐだ。だが見えてもそばにいろ」

「……」

緊張感を帯びた顔立ちでくいつと頷く。

何がとは聞かないところ、目的はしつかりと覚えているらしい。

こちらもすべてを緊張させる。

広い場所へ出る前に、この感覚の原因を突き止めたい。  
少しひらけた場所が見える。蜂の巣も確認できた。

しかし違和感の原因は未だ明らかではない。

念のために持つてきた片手剣の盾を構える。

「……」

同じように巾着袋を構える孫。片手ではムリだつたらしく、両手で構えている。

「ふう……」

息を吐き、双眼鏡を掛け、本気になる。

上手くいかないのはいいが、失敗はダメだ。

そう気持ちを引き締めなおし、あらゆる痕跡を探し始める。